

思い出の宗田一先生

日本医史学会常任理事 大塚 恭 男

医史学、薬史学の先達として永年にわたり親しくご交誼を賜わり、学恩に浴してきた宗田一先生がこの七月七日にお亡くなりになられた。まことに痛恨の限りである。ちょうどその折、ドイツ・オーストリーを旅行していたため御葬儀にも参列することができず大変心苦しく思っている。

昨今、医史学の先輩として学恩に浴してきた先生方がお亡くなりになられることがしばしばあり心寂しく思っていたが、宗田先生はいつまでも居てくださると何となく思いこんでいたために、この度の訃報にはただ茫然とするばかりである。

昨夜は先生の御著書である『図説日本医療文化誌』『渡来薬の文化誌』、『健康と病の民俗史——医と心のルーツ』を次々に繙いて深更に及んだ。先生のお仕事なら何でも知っているつもりだったが、この度もまたあらためて多くのことを教えていただいたのだった。

宗田先生に始めてお目にかかったのは、昭和四二年春に名古屋で医史学会が開かれた時のことである。当時まだ元氣だった父敬節とともに参加させていただき、小川鼎三先生、大島蘭三郎先生らとともに宗田先生にも御挨拶申しあげた記憶がある。その時より数えると三十年に垂んとするありがたい御縁をいただいたこととなる。

医史学会の総会には先生は必ず出席され、御発表をされたばかりでなく、討論も積極的に行なわれた。総会は一年に一度の催しであるので、学術講演もさることながら、先輩の諸先生や友人たちに久しぶりにお目にかかることができる

という楽しみがあった。

宗田先生、三木栄先生らの諸先生が大阪からわざわざお出でになり、初心者当時の私の発表も聞いてくださり、いろいろと貴重なコメントを賜ったことは忘れられない思い出である。

医史学会の楽しみの一つは懇親会であった。この時ばかりは平常近づき難い大先輩の先生方にもくだけた話をうかがうことができたからである。お忙しい先生をわずらわせてお話を承り、結局終列車に間に合わず、拙宅に御案内してお泊りいただくようなこともあった。先生は書も絵も堪能であられ、さらさらとお書きになられた。ある時、先生に絵をおねだりしたことがあった。先生は酔っていてはきちんとしたものには画けないから、いずれ何か書いてあげましょうとおっしゃってくださいました。そして、その時の約束通り、ある日仏僧に忍の一字を配した書を御恵贈くださったのである。この書は今も私の書齋に飾られてあり、日夜私を見守ってくれているのである。

先生から賜った数々の学恩に心からなる感謝を捧げ、お別れの言葉とさせていただくこととする。

平成八年八月六日